

2021 年度【島原湧水さらく】作成及びまちづくりシンポジウム

企画・立案報告書

島原中心市街地街づくり推進協議会への活動協力

2022年3月19日

建築家 近藤 一郎 (有限会社プランーク設計)

建築家 大塚 雄二 (大塚雄二都市建築設計事務所)

2021 年度【島原湧水さらく】及びシンポジウム 等の企画立案にかかわる報告書

■第 1 章 島原湧水さらく・マップの経緯

1、1999 年 10 月、「島原湧水散策路」（湧水トレイル）と名付けた湧水マップをつくった。
市内各所に散在する洗い場、水源、水屋敷、水のモニュメント、水飲場など湧水の設えが多く見られるが、それらを案内して貰い、観て回った。

まちの生活の中に溶け込んでいるそうした設えが楽しく、かつてはもっとたくさんあった事を聞いて、自宅や店の前に、まるで床の間に生け花や自慢の掛け軸を掛けて見せているかのようであった。

それが玉石混交だけに面白さがあり、それだけを網羅した湧水だけを見せるマップがあっけいと思った。当時、島原は湧水百選の一つと言われながら、湧水を紹介するパンフレットは皆無であった。

★そこで、目指したのは、

- 1、観光パンフレットでありながら、方位（オリエンテーション）と縮尺（スケール）を入れた最小限の正確さがある（建築や都市計画の学生等の最初の一步の資料となるように）。
- 2、駐車場と公衆便所、観光客に必要な最小限の情報を入れる。
- 3、島原で街づくりに関わっている人が、自分らが作ったと言える事。

★このマップの目的は、

- ・街を案内するのではなく、町に迷子になる地図、宝探しのような地図、街なかに滞在する事を長くしてしまう地図、「湧水」しか載っていない不親切なこと。
不親切なマップだからこそ、街を探し、街を歩く楽しさを発見してほしい、のである。

島原でも生活の変化が進み、水との関わり合いが薄れて来るだろし、湧水の汚染や枯渇から、洗い場が使われなくなって来る事も原因の一つとなる。やむを得ないとは言え、島原の人々の暮らしの中に湧水が関わっている事が大きいと、小さなマップに表現した。

2、2012 年 3 月、「島原湧水さらく」（湧水トレイル）をつくった。

最初のマップをつくって 13 年が経った。このマップは完成まで約 3 年かかってしまった。

「水屋敷」には 2 つの意味があるとの話しは、興味をそそった。

・宮崎和子氏の「水屋敷について」（島原新聞 平成 9 年 11 月 2 日）から部分的に引用。

- ① 庭に湧水を取り入れて庭づくりをしている屋敷。
- ② ちょっと庭を掘ると水が湧き出して、家の土台が腐りやすく湿気が多く不健康な屋敷。

真逆の意味がある。しかし、2 つの意味は相い重なっているとも思える、古くから在るものは、一つだけの意味以上の意味を含む場合がしばしばあり、長い時間の中で、その時代時代によって意味が異なってくるのが生活の歴史である。溢れる水をうまく使いこなした結果が「水屋敷」と呼ばれるようになったのであろうし、水文化としての形であろう。

「水屋敷」と聞いても、どこに水屋敷があるのか外来者には皆目分からなかった。かつては「島原水屋敷」の商号を持つ石川邸の店（喫茶）ぐらいしか見ることはできなかった。

そんな中、その企画を市に持ち込んで見たが、いくつ水屋敷があって、調査・実測が可能であるのはどこにあるか皆目分らず、企画書をつくることすら出来ないまま、この方針は捨てた。

島原に於いては、伝統的な建築や街並み保存、そして湧水に関する調査がいくつか行なわれて来ているが、その結果である報告書や実測図があっても、市民がそれを簡単に目にする事が出来ない。しかも、見ても面白く無いのは目的が全く違うとは言え、残念しごくであった。きちんとした実測に基づいた図面を身近に見ることが出来て、楽しむことが出来ないかとの想いがあった。

そこで、実測が可能な水屋敷を手始めとして、取り掛かることにした。次に、水の出なくなった洗い場はいつかは忘れられてしまうであろうから、かつてそんな湧水の歴史があった事を記憶だけでも残しておく、とした。水屋敷と共同洗い場をマップの範囲としたが、島原には共同の洗い場は少ない。大半の家が水屋敷的に、宅内に自分の湧水を持っている。だからこそ、水量が減り、水質が悪化すると使われなくなり、簡単に消えて記録にも残らないだろう。

そんな中、島原鉄道の外港以南が廃線になるというニュースが聞こえてきた。しかし、マップには廃線になったとしても線路は残すことにした。口之津駅から博多までの直通列車が、かつては走った幹線の鉄路である。

時代の流れでなくなるのは止むを得ないが、その歴史は残したい。このマップもいつかは、「湧水遺跡マップ」になる可能性がある。

今は廃業した岩永旅館に小さな坪庭とその湧水を見つけた。水神が祭られ、神様に供える榊が湧水に浸されて、異空間というより水の聖地であると強く感じた。

確かに、どの湧水源を見ても水神が祀られており、清浄にしている。島原は自然の大きな恩恵に感謝しつつ、尊敬と畏怖を込めていると思えた。

3. 湧水さらくミニブック

マップが出来たが、実測図を見るには小さすぎ、ポケットに入るサイズのミニブックを追いかけてつくった、マップと合わせて見ると解説となるようにした。

それぞれの解説文は島原の方々に書いて貰ったが、改めてそれぞれの湧水に想いを寄せたのではないだろうか。

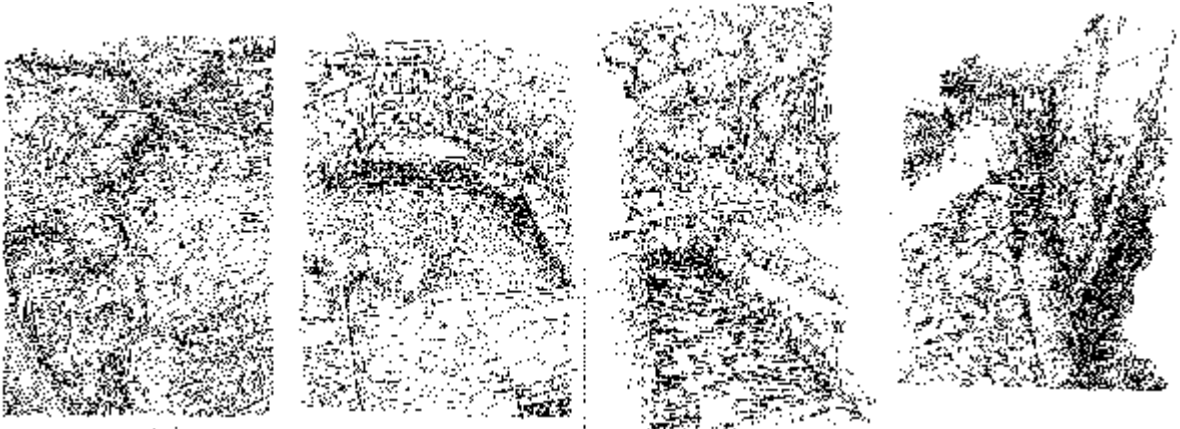
4. 2021年3月 島原万町湧水さらく 堀部邸

堀部邸は大きな旧商家であるが、ながく公開されていなかった。それが、2015年に市に寄贈された。つまり、島原市民の財産となったのである。旧島原街道である万町商店街アーケードに面しているながら、特異なのは、そのアーケードの反対側にある水源からの湧水が屋敷内に引き込まれて、まず庭園の池水となり、それから家の中に引き込まれて台所の流しとして使われる。興味深いのは、庭園の池水にまず使われているのである。

島原の水文化は、街と一体となった水循環をなしているのである。この堀部邸を出た湧水は、次に東の道路にある水路に流れ、次の水循環となるがその出口は「どんどん」の名が付いている、ただの鉄管から水が出ているだけながら、それだけ大事な存在なのであろう。

こうした特色ある水文化を知ってほしい、その価値を自負してほしいと思った。市民が水を大事にしてきれいに使う事で、この水循環は文化として成りたっている。

このマップは島原を訪れる人のためではなく、市民が自分たちの財産の価値を見直すため、その目的である。



■ 湧水さらく Part 4 へ向けた企画

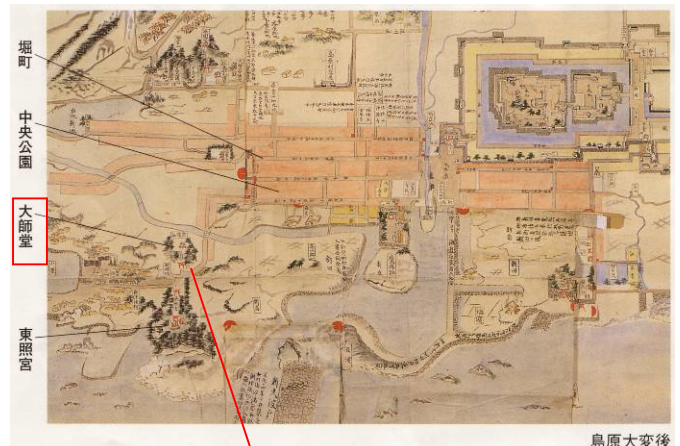
1、天如塔とその界隈の聖地・マップ

寛政4年4月4日（1792年）の島原大変以前は、ここは風待ち湊である島原湊の入口に浮かぶ松島であり、松ノ木が生い茂る風光明媚な島であったとの事。宗像社と松島弁財天が祭られており、年に一度漁師が島に渡って、大漁祈願の奉納相撲をしていた、漁師にとっての聖地であった。

島原大變の土石流で島の廻りはすっかり埋め尽くされて陸続きとなり、今は小高い丘に、松島弁財天宮、馬頭観音堂、祐徳院稲荷神社、鎮西八十八ヶ所霊場第八十八番札所、子安観音堂、そして台山天如塔、その脚元には弁天山理院大師堂が建つ、神様たちが集う一大聖地である。いにしえからの自然の恵みへの恩恵と畏怖がこの崇拝の地をつくったのであろう。そして天如塔はからゆきさんの悲しい願いを伝える唯一の遺構。帰るに帰れない、からゆきさんたちの魂が眠る処である。灯台のような塔の容貌はだからである、遥か遠い異国に眠るからゆきさんに、いつまでも一条の光を投げかけている。

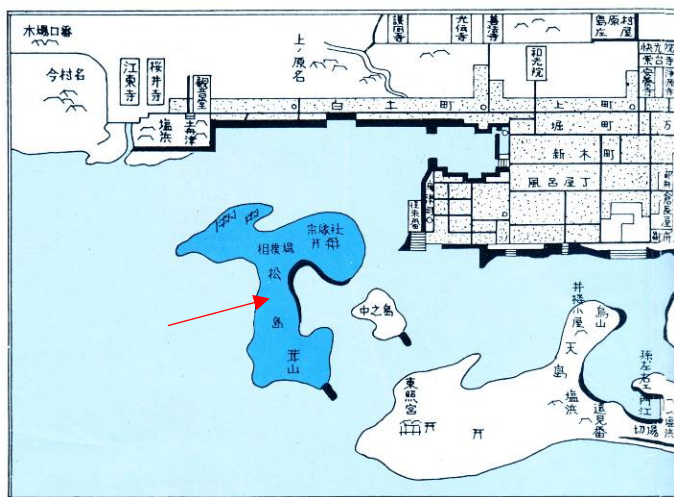
ここを聖地と呼ぶすに何と呼ぶのか、聖地であることを見れるマップが必要である。

この図は、島原城内外の絵図中、最も古い絵図

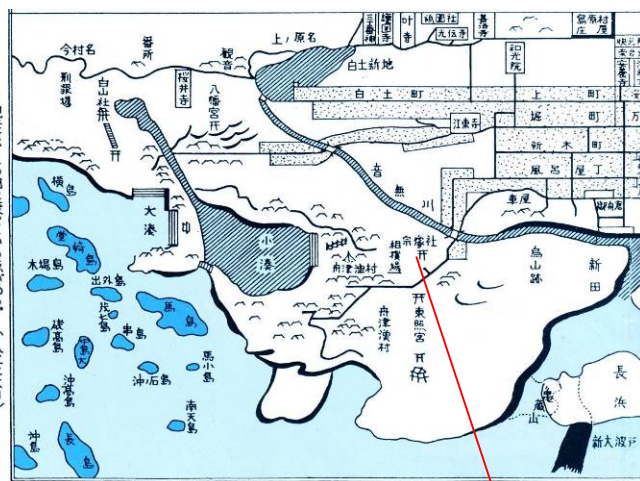


・ 図-1 島原城内外の絵図で最も古い絵図（島原図書館内 松平文庫所蔵）

旧松島



• 図-2 島原湊付近の絵図（年代不明）：→は松島を示す



宗像社がある事から、旧

2、小早川邸：湧水回遊庭苑と屋敷（その他に堤内邸）

藩政時代の田屋敷は、上級武家屋敷地区である。現在に至っても常盤御殿跡が残り、旧上級武家屋敷の敷地割が残り、当時の屋敷と庭園の面影が見える、小早川邸は旧島原藩老連判役 300 石佐野勇太郎屋敷跡である。

常盤御殿から流れ出す湧水は、量石で分けると、布井邸の屋敷を通り、小早川邸に流れ込む。どの屋敷にも井戸があり、その水も加わり、庭園を流れて屋敷を巡っていく。こんな水循環が、藩政時代の島原では確立しており、湧水庭園・旧武家屋敷が一体となった城下町の景観と水文化を見せていた。島原ならではの。

未調査であるが、堤内邸など、市内には当時を物語る庭園と建築物がいくつか残っている、と聞いている。時代の変化の中で埋没してしまう前にそれらの価値をあらためて評価し、市民が楽しめるビジュアルなマップができると町が楽しくなる。この小早川邸も市に寄贈されており、市民の財産である。



• 写真-1, 2 小早川邸の庭園と屋敷

水屋敷や田屋敷などの言葉が当たり前にある島原にとっては、庭園は特別な存在ではないと思われるが、街の風景として庭園が散在する「庭園都市」は貴重である。

町に魅力が見られるのは、そこに昔から今に至る風景や生活が垣間見えることであり、新しいものと古いものが混在して、視点を変えるとそれらが見えてくる事である。古くからあるとしても、すべてが残っている訳ではなく、価値あるものが残っている、そんなこんなが玉石混交にある島原は、人々を惹き付ける。

コロナ禍を経て、我々の生活も変わらざるを得なくなり、かつてとは異なってきている。次のマップ含めた企画は、島原に見える、地形的・地勢的・歴史的などの魅力と個性をもっと引出せるかである。

■ マップ作成準備作業

- 2020年2月11・12日に、小早川邸及び天如塔の実測調査を行った。その成果は、CADで実測図を入力中である。CADデータとして作成する事で、そのデータは今後の資料としての有効利用と公開性が広がる。
ちなみに、堀部邸も最終成果品としては手描きとしているが、CADデータで作成している。但し、CADでは、湧水さらくのマップとしての表現性や視覚効果として欠ける、手描きは描き手の個性が強くなることから、人々への印象に残るためにはあくまでも手描きである。
- 小早川邸は、屋敷の廻り四方が庭園であり、それぞれ性格や機能が異なる庭園空間である事から、その空間の違いをきちんと表現できるといいと思っている。
- 天如塔は、単独では小さな建築物であるが、かつて松島であったことが想起されるように、弁財天、観音堂、稲荷社が小高い丘に集まった聖地である様相が見られることから、旧松島の範囲を対象としたマップにするとより関心を惹き付けると思われる。

※添付図面（何れも、現在未完成）

- 1, 小早川邸配置・1階平面図 1:160
- 2, 天如塔のある松島の配置図 1:900
- 3, 天如塔1階平面図 1:100
- 4, 天如塔2階平面図 1:100
- 5, 天如塔南面立面図 1:100
- 6, 天如塔断面図 1:100

■第2章 シンポジウムへ向けて

1月27日に予定したが、延期になった「まちづくりシンポジウム」には、パネラーとして、大塚雄二、近藤一郎が参席し、話題提供する準備をしていた。

1. パネラー：大塚雄二

「島原の街の将来像～歴史的町並み・湧水・古民家を生かす。」とのテーマに沿って、島原のまちづくりへ向けた幅広い提案が出来る内容を意図しました。

大塚雄二の自己紹介から、その趣旨説明とします。

建築家としての設計活動のために、1997年に設計事務所を開設し、様々な用途の建築設計に携わっています。「大塚雄二都市建築設計事務所」とした事務所名は、都市と建築を共に考えながら設計するという姿勢からです。

設計業務としては、住宅から集合住宅、病院建築、教育施設、商店街のまちづくりなどを行ってきました。それ以前には、高橋志保彦氏の事務所で、15年間に渡り、アーバンデザイン、ニュータウン・商店街のまちづくり、建築設計の仕事をしていました。

東日本大震災を契機に、普段見慣れている景観が急激に変化していることに危惧を抱いて、都内の古い建物の記録を個人的に撮影し始めました。明治以降、東京は1923年の関東大震災、第二次世界大戦と大きな災害によって著しく街のイメージが変わっています。東日本大震災も私にとっては同じイメージがありました。

そうした時、日本建築家協会関東甲信越支部・住宅部会から、まち歩きの講師を依頼され、2012年から東京都内を中心に13回に渡って、まち歩きの企画・運営を行って来ました。

その内容は、JIA 日本建築家協会「市民住宅講座」「街」に出て考えよう、住まいと暮らしというもので、市民講座としてのまち歩きは、街に出て自分たちの住まい、街を考えようとの趣旨でした。街の有りようは、そこに住む人々・地形・歴史・経済など様々な要素が重なることで、まちのイメージが出来上がります。そこには魅力が発見できますが、問題点も存在します。まち歩きで気づいたことが、自分の住む場所に対してのヒントになり得ると思っています。

【島原のまちづくり提案：しまばら水と緑の庭園都市】

→市民が主体となるまちづくり：オープンガーデンの可能性を考える

- ・価値ある庭の再認識（重要性・独自性の確認・認識）→要調査
- ・維持する方法の模索→手入れには手間とお金がかかる。街を上げての事業にする。
- ・主体は市民：自慢の庭をアピール。人と人とか関われるようにする。
- ・自主性がないと継続は不可能である

→相乗効果：水のネットワーク、魅力のある施設とリンクさせる。

※資料として、シンポジウム用のスライドを添付します。

2. パネラー：近藤一郎

本報告書の冒頭に記した、島原湧水さらくの街あるきマップの経緯と、次のマップ（小早川邸、天如塔）への意図と展開が話の切り口となります。

なぜ、街あるきマップをつくるのか、との声があるかも知れませんが、街をあるくと、街を知る事ができ、それは街の歴史と未来を見る事につながることから、何らかの関心を惹くマップがあればいいと思っています。

島原は普賢岳の巨大災害を受けたにも拘わらず、その普賢があることに拠って、特徴ある地理的・地形的・地質的環境がある。それを生かす形で島原城下町が成立して繁栄して来たことから、その歴史を辿る必要性和面白さがあります。

島原の湧水は、単なる水資源として見るのではなく、普賢のふもとに広がる植生・気候、地形に始まり、農業、畜産、水産などの活動の源となっている事を考えたいと思います。

湧水は、生活用水としての水源であることは勿論ですが、海に至っても海中湧水があり、漁業にも大きな影響を与えています。例えば北の海でないと育たないはずの昆布が島原湾でとれる。これは驚きですが、そうした水循環のサイクルや多様な生態系の存在は、島原の町の有り方に影響を与えているはずで。

島原の町づくりや、商業的な発展の在り方に於いても、そうした幅広い観点からの視点を掘りおこしたいと考えています。従って、農業や漁業・林業などから島原半島全域に渡るあらゆる方面に渡って考える事が、島原の街づくりにつながると思われます。そして、外部からの観光・来訪者を迎える事ができる。そのための豊かな人材と実績が島原にはある。島原の地域性をはっきりと意識する視点を立ち上げてほしいと思います。

※資料として、スライドを添付します。

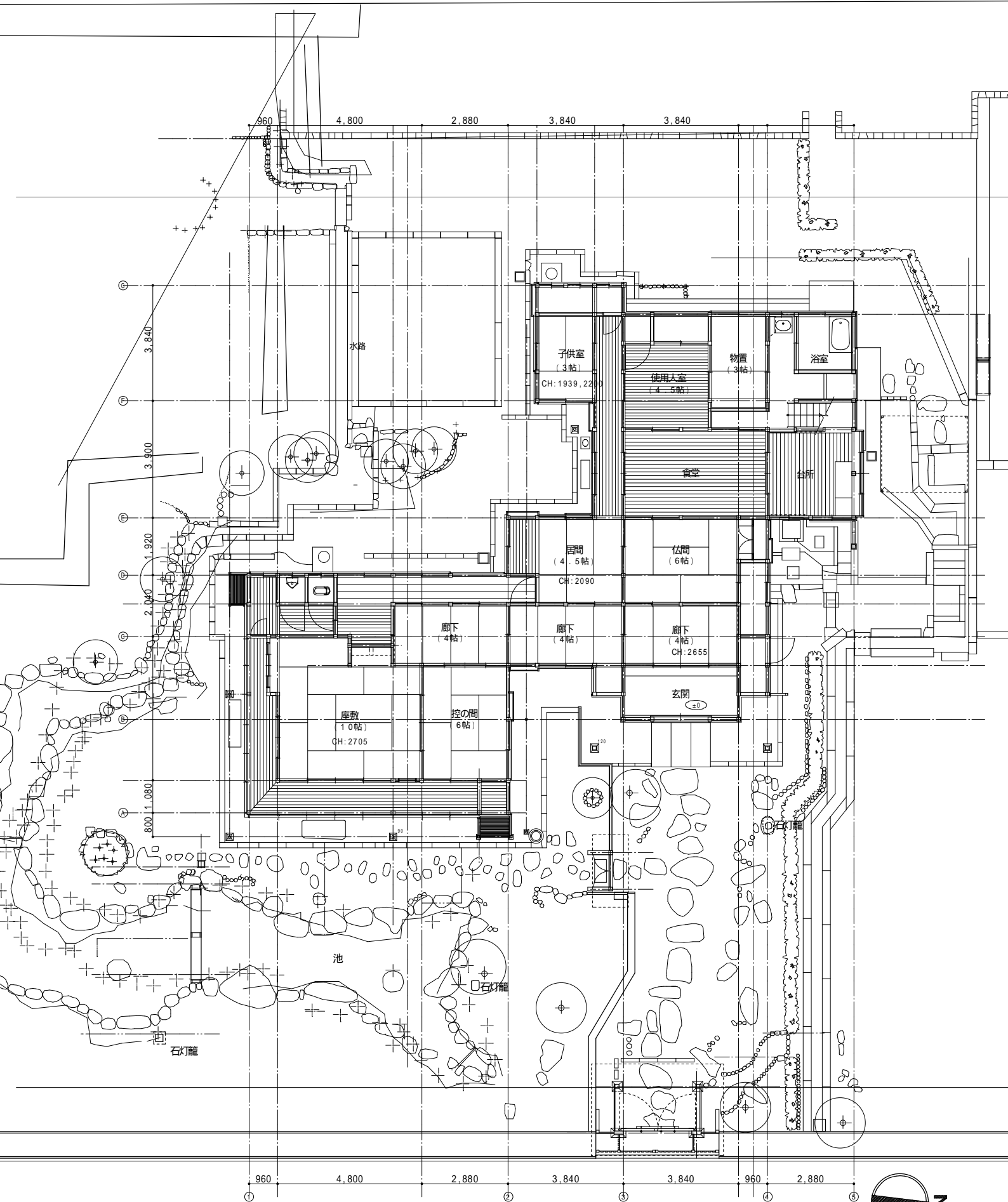
■第3章 資料編

1、小早川邸と天如塔の実測図

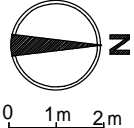
・シンポジウムへ向けたスライド（予定稿）

2、大塚 雄二 島原の街の将来像 ～歴史的な町並み・湧水・古民家を活かす～ まち歩きからまちづくりを考える

3、近藤 一郎 普賢の空の下、湧水は流れる



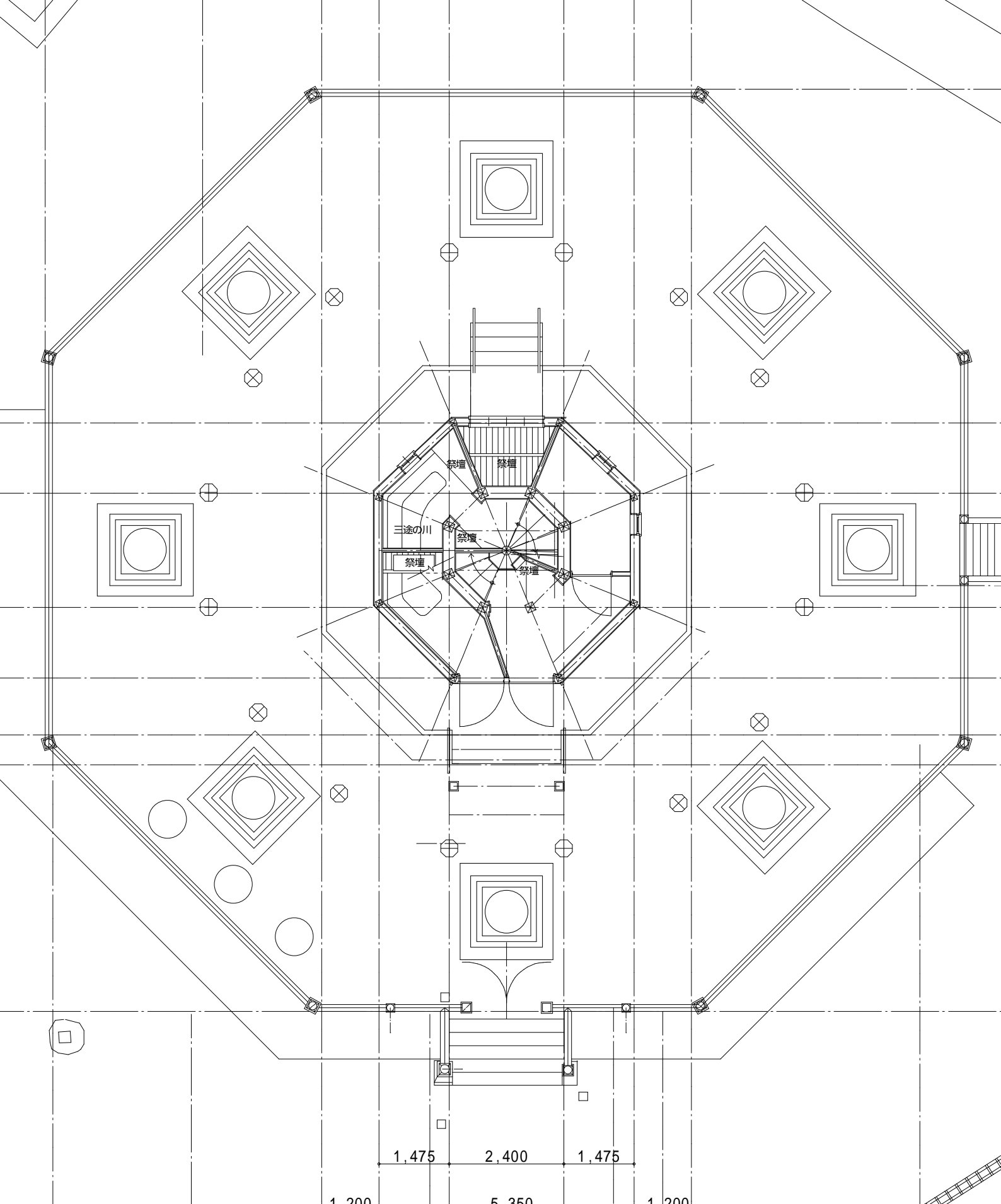
小早川邸 配置・平面図 S/1:160





天如塔 配置図

S/1:900



1,475 2,400 1,475

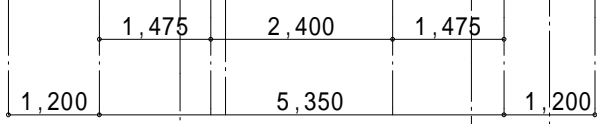
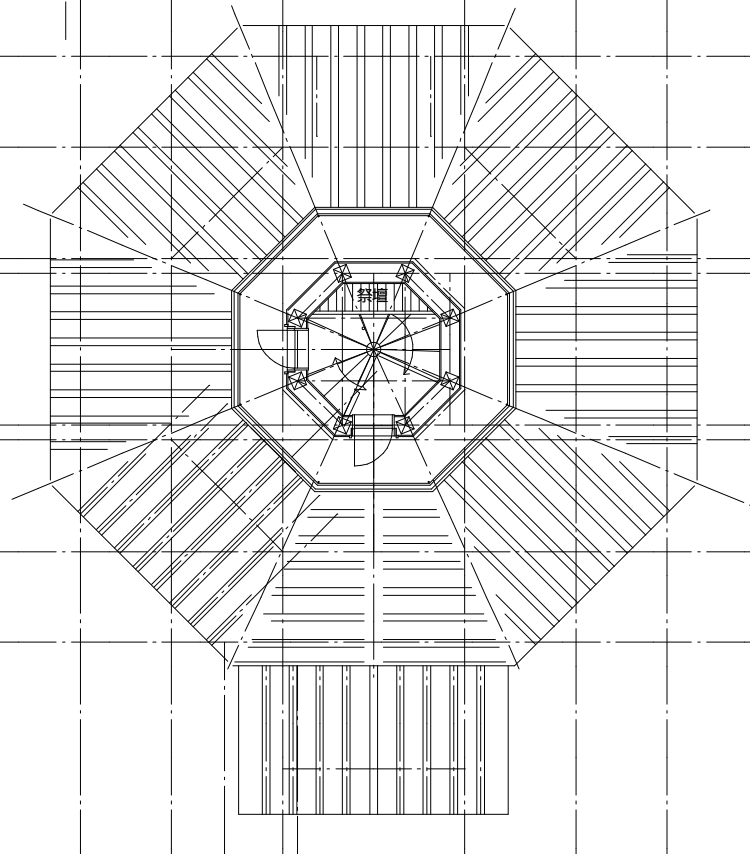
1,200

5,350

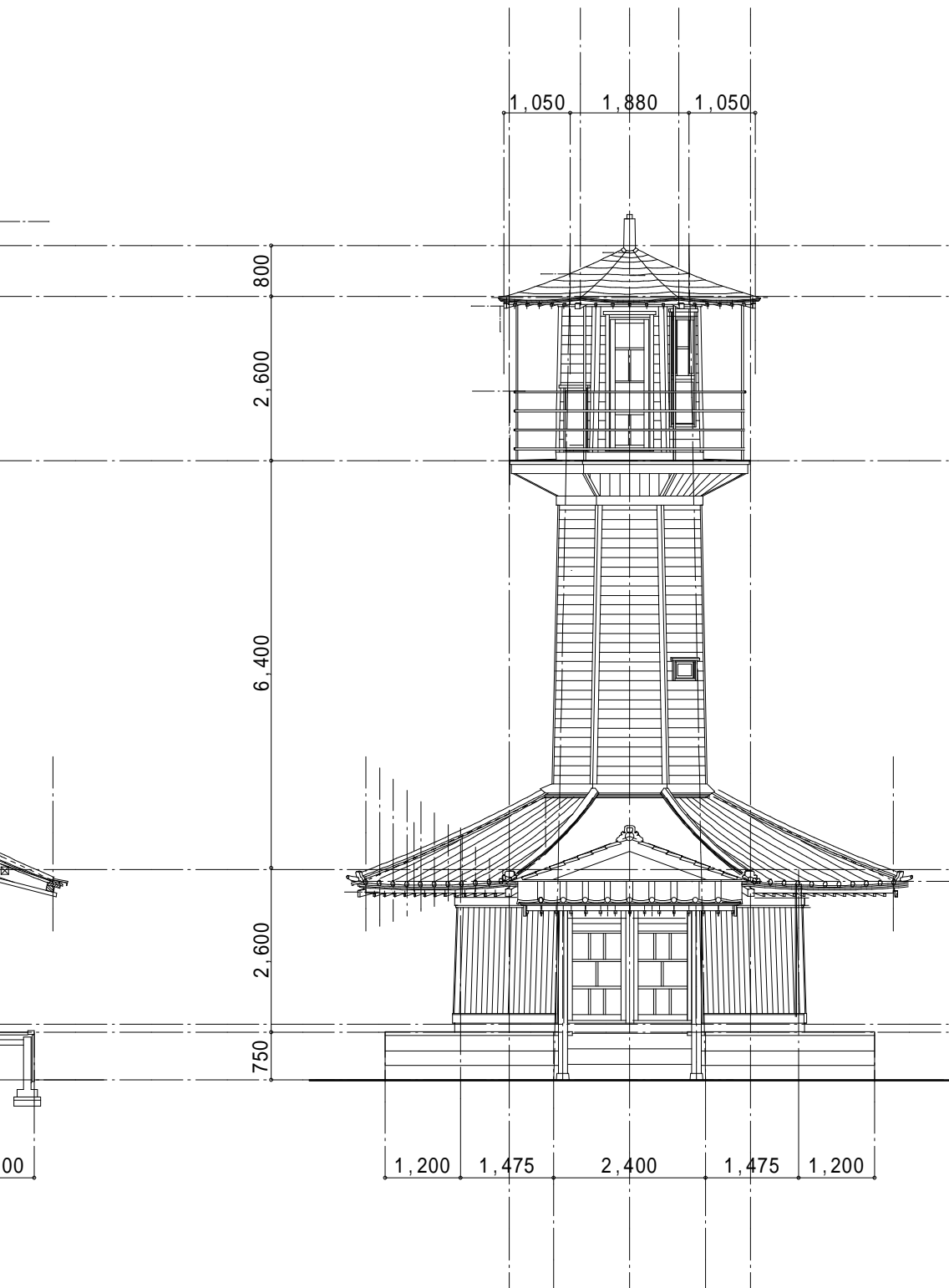
1,200

天如塔 1階平面図

S/1:100

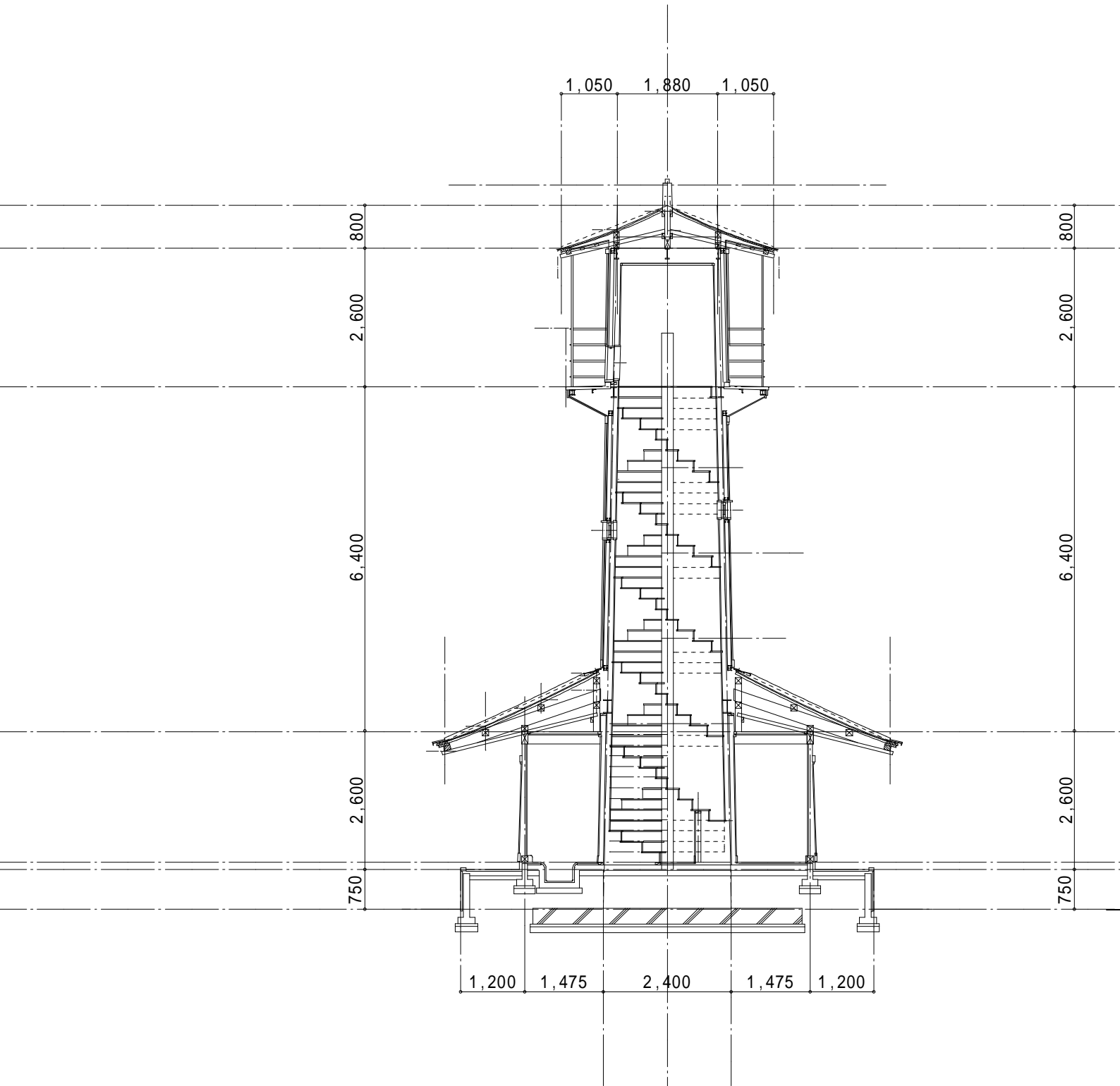


天如塔 2 階平面図 S/1:100



天如塔 立面图

S/1:100



天如塔 断面图 S/1:100

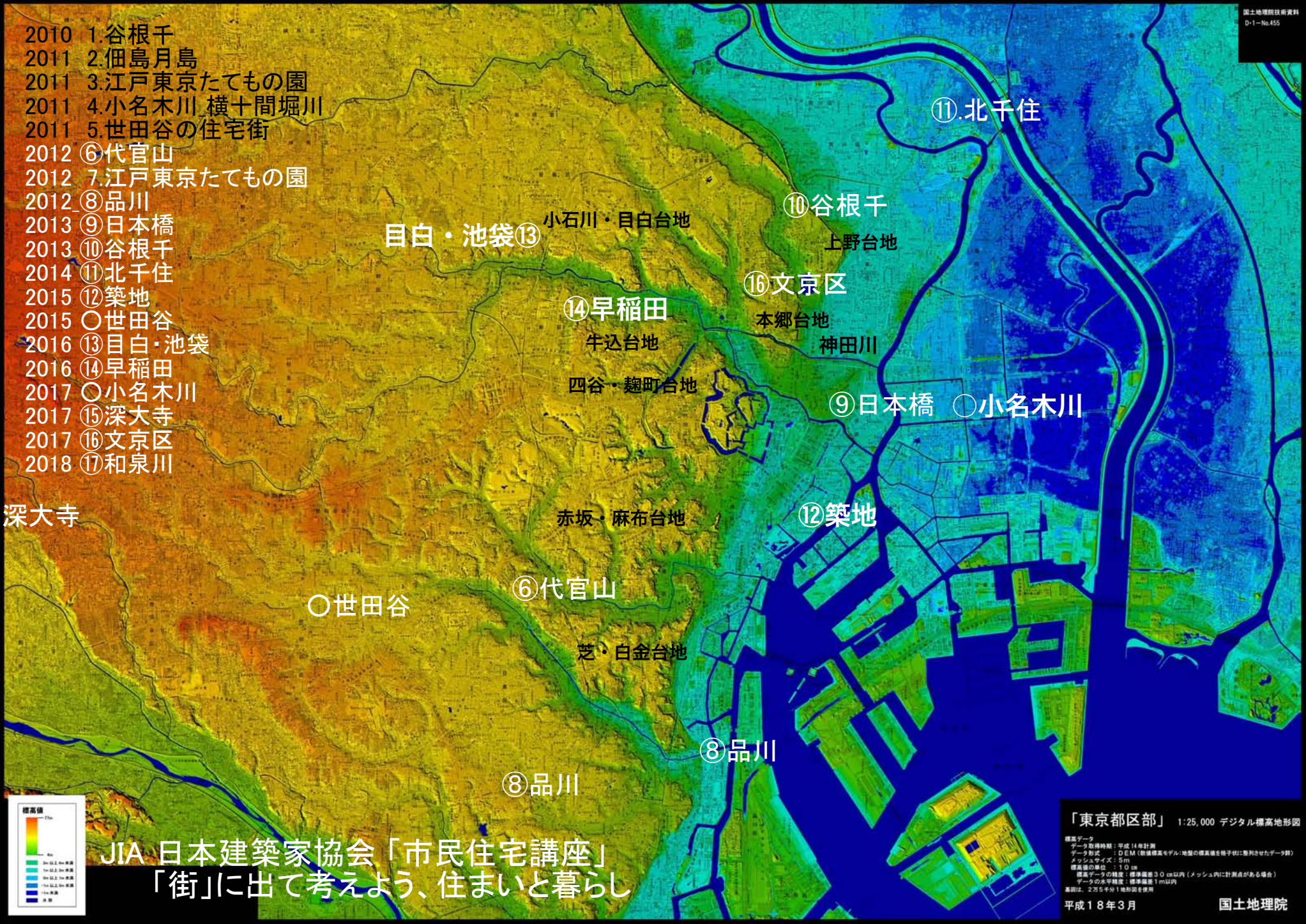


2022年1月27日
 島原の街の将来像
 ～歴史的な町並み・湧水・古民家を活かす～

まち歩きから
 まちづくりを考える

大塚雄二都市建築設計事務所
 大塚雄二

- 2010 1.谷根千
- 2011 2.佃島月島
- 2011 3.江戸東京たてもの園
- 2011 4.小名木川 横十間堀川
- 2011 5.世田谷の住宅街
- 2012 ⑥代官山
- 2012 7.江戸東京たてもの園
- 2012 ⑧品川
- 2013 ⑨日本橋
- 2013 ⑩谷根千
- 2014 ⑪北千住
- 2015 ⑫築地
- 2015 ○世田谷
- 2016 ⑬目白・池袋
- 2016 ⑭早稲田
- 2017 ○小名木川
- 2017 ⑮深大寺
- 2017 ⑯文京区
- 2018 ⑰和泉川



⑮深大寺

○世田谷

⑥代官山

赤坂・麻布台地

四谷・魏町台地

牛込台地

⑭早稲田

目白・池袋⑬

小石川・目白台地

⑩谷根千

上野台地

⑯文京区

本郷台地

⑨日本橋

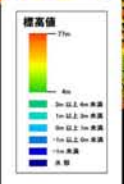
○小名木川

⑫築地

芝・白金台地

⑧品川

⑧品川



JIA 日本建築家協会「市民住宅講座」
「街」に出て考えよう、住まいと暮らし

「東京都区部」 1:25,000 デジタル標高地形図

標高データ
データ取得時期：平成14年計測
データ形式：DEM（数値標高モデル・地盤の標高値を格子状に整列させたデータ群）
メッシュサイズ：5m
標高値の単位：1.0m
標高データの精度：標準偏差3.0m以内（メッシュ内に計測点がある場合）
データの水平精度：標準偏差1m以内
基図は、2万5千分1地形図を使用

平成18年3月

国土地理院

⑰和泉川

主催：社団法人 日本建築家協会(JIA) 関東甲信越支部 住宅部会

JIA 日本建築家協会「市民住宅講座」 「街」に出て考えよう、住まいと暮らし

- 2008 0.和泉川（横浜市） : 東山の水辺（横浜市）
- 2009 0.江東・渋谷 : アーキテクトガーデン2009 エクスカーション『江戸の粹、東京の粹』
- 2010 1.谷根千
- 2011 2.佃島月島
- 2011 3.江戸東京たてもの園
- 2011 4.小名木川_横十間堀川
- 2011 5.世田谷の住宅街
- 2012 ⑥代官山 : 「代官山とヒルサイドテラス」
- 2012 7.江戸東京たてもの園 : 「日本的な住まいと暮らし」
- 2012_⑧品川 : 江戸の南の玄関口「品川宿」と渋沢栄一の郊外住宅地「洗足」
- 2013 ⑨日本橋 : 「江戸の中心市街地」水面から見る「橋」と「街」
- 2013 ⑩谷根千 : 谷中・根津・千駄木「路地と下町の暮らし」
- 2014 ⑪北千住 : 江戸の北の玄関口「千住宿」
- 2015 ○世田谷 : 建築家+写真家と歩く「世田谷の住宅街」
- 2015 ⑫築地 : 「築地」に西洋文明への足跡を探す
- 2016 ⑬目白・池袋 : 「目白・池袋」に近代化の足跡を探す
- 2016 ⑭早稲田 : 「都市に見るまちと暮らし」
- 2017 ○小名木川 : 小名木川舟巡り・ロックゲート体験と日本橋散策
- 2017 ○深大寺 : オフグリッドの建築体験と深大寺散策
- 2017 ⑮文京区 : 「本郷の地理・歴史と暮らし」
- 2018 ⑯和泉川（横浜市） : 景観から風景へ「暮らしの中の自然」

美しく住みやすい街と創造性豊かな住文化実現への一環として、(社)日本建築家協会・住宅部会では、自由・独立した立場で一般の方向けのセミナーを開催しています。お気軽にご参加下さい。

2013 年 4 月 20 日 (土) 12:45 ~ 16:00

第 9 回
4 月
2013 年

街歩き・街並編「江戸の中心市街地」 水面から見る「橋」と「街」



文化、経済、物流の中心であった日本橋川、神田川、隅田川に囲まれた江戸・東京の中心市街地を舟と徒歩で巡ります。かつて身近な存在であった江戸の河川に親しむ機会は殆ど無くなりました。江戸っ子達の目線に近い静かな電気ボートに乗り、水面から 45 の橋と東京の街を見た後、日本橋からお茶の水までを散策いたします。

- お申込は先着順で定員になりしだい締切らせていただきます。
舟巡り+街歩き 定員 9 名
街歩きのみ 定員 20 名

- 街歩き案内人は日本建築家協会住宅部会の建築家です。
- 舟めぐりは江戸東京コンソーシアムの船を貸切ります。
- 当セミナーについての問い合わせ先
住宅部会市民住宅講座 担当：湯浅剛 (アトリエ六曜舎)
TEL 042-483-8686 Eメール: at@rokuyosha.com

主催：社団法人 日本建築家協会 (JIA) 関東甲信越支部 住宅部会
JIA 住宅部会 <http://www.jia-kanto.org/jutaku/>

(社) 日本建築家協会 (JIA) The Japan Institute of Architects 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18
社団法人日本建築家協会 (JIA) は建築の設計監理を専業とする日本唯一の建築家の職能団体です。なかでも住宅部会は主に住宅建築の設計・監理をしている建築家の集まりです

行程 ※参加者の方々に別途詳細をお知らせいたします。

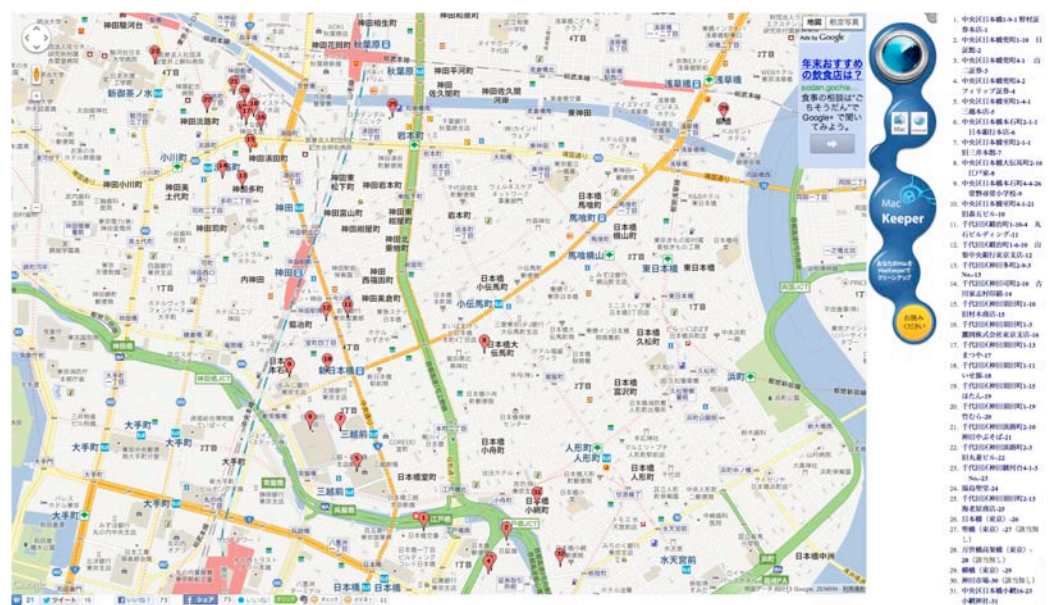
- ◇現地集合
- <舟めぐり> 約 1.5 時間
- ◇日本橋川→神田川→隅田川→日本橋川
- <街歩き> 約 4.5 Km 1.5 時間
- ◇日本橋界隈からお茶の水まで
- お茶の水駅周辺で懇談会 (自由参加)

「市民住宅講座」街歩き・セミナー申込書 12:45 ~ 16:00 (舟めぐり+街歩き)
2013 年 4 月 20 日 (土) 14:30 ~ 16:00 (街歩きのみ)

フリガナ	フリガナ	フリガナ	フリガナ
お名前	年齢	歳	ご職業
ご住所 〒	都道府県		
TEL ()	FAX ()		
E-mail	参加ご希望人数 (ご本人含む)		名
ご希望セミナー	第 9 回 2013 年 4 月 20 日	<input type="checkbox"/> 舟めぐり+街歩き (参加費: ¥500+ 舟賃 ¥3,150 = ¥3,650)	<input type="checkbox"/> 街歩きのみ (参加費: ¥500)

申込先 ■ E-mail または F A X にてお申込み下さい
 (社) 日本建築家協会関東甲信越支部住宅部会市民住宅講座係
 jutaku @ jia-kanto.org
 FAX : 048-954-2532

・水面から見る東京がかつて水の都だったことを再認識させる。
 ・目先の利便性を追求することで持続性が失われる。日本の起点がその当時の価値観で作られ、また変わろうとしている。



美しく住みやすい街と創造性豊かな住文化実現への一環として、(公社)日本建築家協会・住宅部会では、自由・独立した立場で一般の方向への「まち歩き」を開催しています。お気軽にご参加下さい。

2017 年 11 月 18 日 (土) 13:00 ~ 16:00 まち歩き (17:00 ~ 懇親会・自由参加)

第 15 回
11 月
2017 年
まち歩き・街並編：文京区
「本郷の地理・歴史と暮らし」



東京は、台地と谷地がある変化に富んだ街です。

高台の武家地、谷戸の長屋の構成は、街の姿は変わっても、その歴史は色濃くこの地域に引き継がれています。江戸時代、幕府の学問の府である昌平坂学問所が本郷台に置かれたことから始まり、文京区のイメージとなっています。明治以降の近代化の過程で、文教地区である本郷の学生、学者、文化人の街の暮らしがどのように変わってきたか、本郷台を歩きながら考えてみたいと思います。

- お申込は先着順で定員 20 名になりしだい締切らせていただきます
- 参加費：1,000 円
- まち歩き案内人は日本建築家協会 住宅部会の建築家です
- 当セミナーについての問い合わせ先
住宅部会市民住宅講座 主催：湯浅剛 (アトリエ六曜舎)
Eメール：at@rokuyosha.com

主催：公益社団法人 日本建築家協会 (JIA) 関東甲信越支部 住宅部会
JIA 住宅部会 <http://www.jia-kanto.org/jutaku/>

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA) The Japan Institute of Architects 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18
公益社団法人 日本建築家協会 (JIA) は建築の設計監理を専業とする日本唯一の建築家の職能団体です。なかでも住宅部会には主に住宅建築の設計・監理を行っている建築家の集まりです

「市民住宅講座」まち歩き申込書
2017 年 11 月 18 日 (土) 13:00 ~ 16:00 まち歩き
(17:00 ~ 懇親会・自由参加)

フリガナ			
お名前	年齢	歳	ご職業
ご住所 〒	都道府県		
TEL ()	FAX ()		
E-mail	参加ご希望人数 (ご本人含む)		名

ご希望セミナー 第 15 回 2017 年 11 月 18 日 まち歩き・街並編：文京区の台地と谷戸「本郷の地理・歴史と暮らし」 懇親会
09132016_05

申込先 ■ E-mail または FAX でお申込み下さい
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 住宅部会 市民住宅講座係
jutaku @ jia-kanto.org
FAX : 0266-24-2981



2017 まち歩き・町並み編：文京区「本郷の地理・歴史と暮らし」

東京大学を中心に、下宿屋から始まった多く存在した旅館（旅館街）、阿部様が開発した学者が多く住む高級住宅地、谷地の昔ながらの樋口一葉も暮らしていた長屋、本郷通り沿いの看板建築の古本屋。大学と関連ある施設が街の雰囲気を作り出している。

- 本郷通り：旧中山道
- 神田上水（小石川上水）
：家康が江戸に入って小名木川と並ぶ最初の工事
神田川から目白で取水、後樂園（水戸藩邸）を通り、水道橋で神田川を跨ぎ内神田へ江戸城へ
- 東京大学
 - 17世紀初頭に下屋敷・天和3（1683）年加賀藩上屋敷
中山道に沿って中屋敷（現在の文京区駒込）、下屋敷（現在の板橋区加賀
 - 明治4年に収公されて文部省用地
 - 東京医学校が明治9年に移転
- 高級住宅地：西方の住宅地（阿部様の住宅地）
 - 江戸期中～後期：備後福山藩阿部家中屋敷・下屋敷（老中首座阿部正弘はペリーと1864年日米和親条約）
 - 明治10年以降～昭和初期にかけて、阿部家自らが高級住宅地として開発。昭和3年下水道施設と電話線の地中化
 - 東京大学が近隣にあり、多数の学者や文化人が住んだ、学者町
 - 住宅地としての特徴：銭湯・店舗・下宿屋の営業は認めず。旧藩士や同郷人を優先的に入居させたことでその後のコミュニティーの方向付けとなる。防火規制（瓦屋根）
- 昔ながらの木造旅館
：時代の流れに沿いながら用途を変更しながら生きながらえてきた
 - 賄い付き下宿屋→下宿屋兼旅館 → 旅館（修学旅行生）→減少傾向
↓（関東大震災以降） 戦後 ↓
アパート ホテル
 - 本郷界隈の下宿屋数
 - 本郷界隈の旅館数の推移：本郷旅館街時積地図（法政大学学生制作）
明治44年：11軒・大正2年：346軒・大正15年：166軒・昭和3年：88軒
平成28年：6軒（朝陽館本館朝明館:2016閉館・鳳明館3棟現役・大栄館：2014閉店）
- 有名作家の痕跡：樋口一葉が暮らしていた長屋
- 復興小学校：関東大震災によって196校の内117校が消失。復興事業として、RC学校・小公園併設。典型的な元町小学校
- 渋沢栄一の痕跡



美しく住みやすい街と創造性豊かな住文化実現への一環として、(公社)日本建築家協会・住宅部会では、自由・独立した立場で一般の方向への「まち歩き」を開催しています。お気軽にご参加下さい。

2018年6月2日(土) 13:30~16:30 まち歩き (17:00~懇談会・自由参加)

第16回
6月
2018年

まち歩き・都市の中の自然編:和泉川
住民が自ら作る風景 「暮らしの中の川」



横浜市の和泉川は、瀬谷市民の森を源流に、境川に流れ込む、全長約10kmの住宅地を流れる二級河川です
排水のための垂直護岸の川が段階的に整備され20年以上が経過します
場所ごとに様々な様相を見せ、子供が遊ぶ風景は昔からある自然と錯覚します
この和泉川の自然は、行政の力だけではなく、地域住民の見守りと維持管理によって支えられてきました
2005年の土木学会賞を受賞した「東山の水辺・関ヶ原の水辺」を歩き、体感し、都市の中の自然について考えてみたいと思います

- お申込は先着順で定員20名になりしだい締切らせていただきます
- 参加費:1,000円
- まち歩き案内人は日本建築家協会 住宅部会の建築家です
- 当セミナーについての問い合わせ先
住宅部会市民住宅講座 主査:湯浅剛(アトリエ六曜舎)
Eメール: at@rokuyosha.com

- 行程
- ※参加者の方々に別途詳細をお知らせいたします
 - ◇現地集合(和泉川周辺の相模鉄道の駅)
 - ◇和泉川宮沢遊水池→関ヶ原の水辺
→東山の水辺→二ツ橋の水辺、他
 - ◇全行程約5km弱
 - ◇まち歩き後、懇談会

主催:公益社団法人日本建築家協会(JIA)関東甲信越支部 住宅部会
JIA 住宅部会 <http://www.jia-kanto.org/jutaku/>

公益社団法人日本建築家協会(JIA) The Japan Institute of Architects 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18
公益社団法人日本建築家協会(JIA)は建築の設計監理を専業とする日本唯一の建築家の職能団体です。なかでも住宅部会は主に住宅建築の設計・監理を行っている建築家の集まりです

「市民住宅講座」まち歩き申込書 2018年 13:30~16:30 まち歩き
6月2日(土) (17:00~ 懇談会・自由参加)

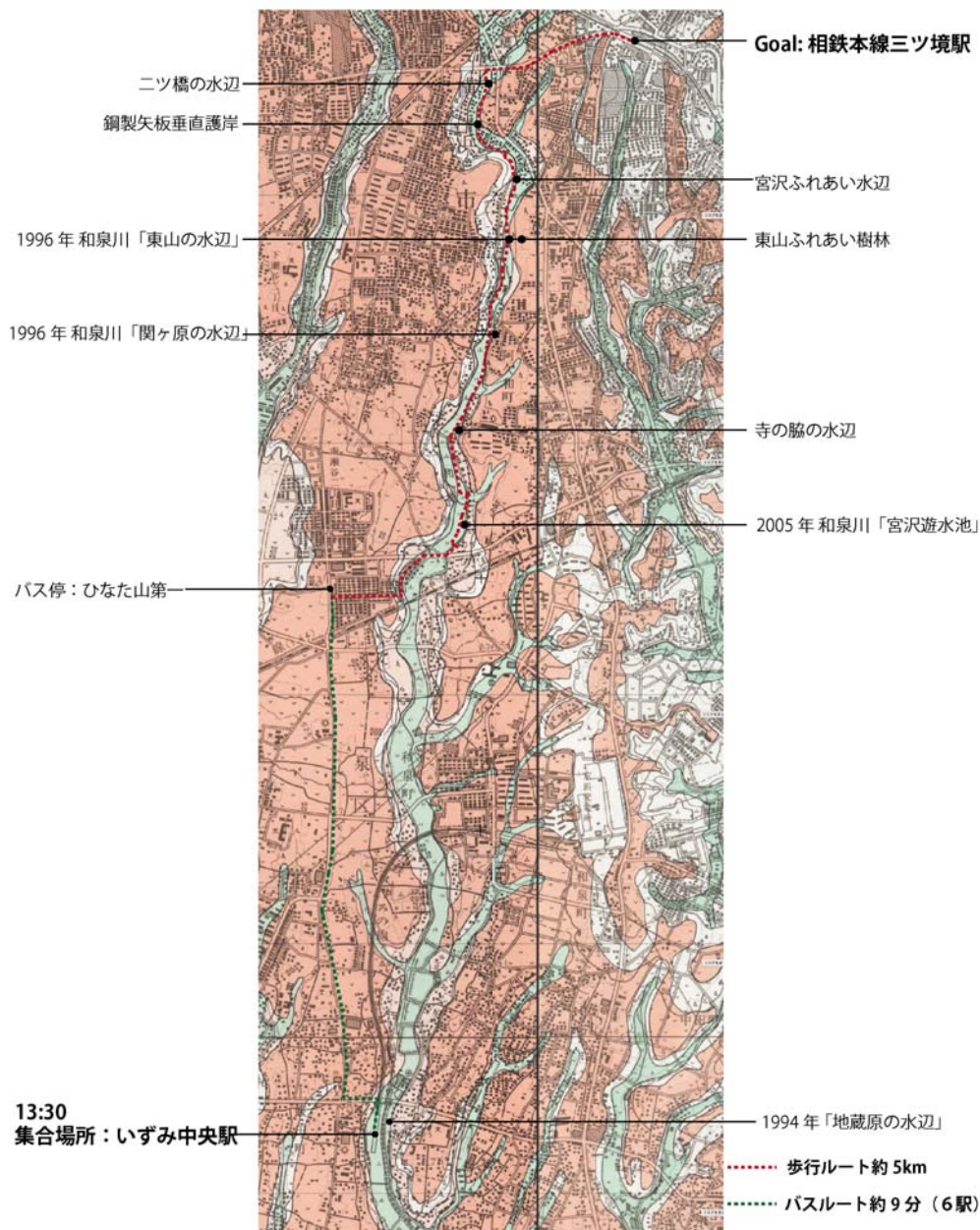
フリガナ		フリガナ	フリガナ
お名前	年齢	歳	ご職業
ご住所 〒	都道府県		
TEL ()	FAX ()		
E-mail	参加ご希望人数(ご本人含む)		名

ご希望セミナー 第16回2018年6月2日 まち歩き・都市の中の自然編:和泉川 景観から風景へ「暮らしの中の自然」 懇談会
09132016_05

申込先

■ E-mail または F A X にてお申込み下さい jutaku@jia-kanto.org
公益社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部住宅部会市民住宅講座係 FAX: 044-862-7335

それぞれの計画、設計、管理段階でキーマンが存在している。
一貫してキーマンが関わるシステム。
住民が関わることによって徐々に作られた景観が風景となっている。



2018 まち歩き・都市の中の自然編：和泉川 住民が自ら作る風景「暮らしの中の川」

- 和泉川：ウィキペディア
 - 水系 二級水系 境川
 - 種別 二級河川
 - 延長 9.42 km
 - 水源 横浜市瀬谷区
 - 水源の標高 -- m
 - 河口・合流先 境川（横浜市戸塚区）
 - 流域 神奈川県
- 河川環境に対する意識の高まりに伴い、治水・利水機能を優先して整備された河川に対する生物の生息環境の創出及び景観形成及び親水整備がなされた
- 横浜市には河川環境整備としての「多自然川づくり」のキーマン（吉村伸一氏横浜市下水道局河川計画課）の存在が和泉川の整備が先駆的事例になった。
- バックアップする建築家の存在(キーマン)：松井正澄氏
- 和泉川では1971年より治水整備が実施
 - 1987年和泉川環境整備基本計画(案)の策定
 - 1989年ふるさとの川モデル事業に指定
 - 1990年和泉川水辺環境整備計画の策定
 - 1996年「東山の水辺」整備完了
 - 1997年「関ヶ原の水辺」整備完了
- 横浜市では1997年に「水辺愛護会制度」を導入
 - 河川整備・維持管理に関する役割分担の明確化
 - 水辺愛護会制度に基づき河川の維持管理活動は市民団体がを行い、河川の構造整備や運営管理は行政が行う
- 和泉川を拠点とする水辺愛護会17団体（補助金あり）
 - ：住民が管理する。清掃・除草活動
 - ：生物相の種数を増やすために河川環境の改善の試み
 - ：小学校との連携
- この場所を気に入り引っ越してきた高校教師の存在(キーマン)
- 2005年の土木学会デザイン賞（以下講評抜粋）
 - ：空間デザインの社会システムに一石を投じている
 - ：生き物が戻り人と川のつながりが戻った
 - ：子供達がのびのび育つ事の出来るこのような身近かな自然は重要である。まちづくり計画としてのこのプロジェクトの成果が育てる子供達の将来が楽しみである。
- 横浜市により2015年度から新たに水辺愛護会の活動表彰式を開催



まち歩きからの気づき～まち歩きから街づくりへ

まち歩きは既存の街を把握して、これからの街の有り様を考えるきっかけとなる

■ JIA建築家協会「市民講座」の「まち歩き」

- ・ 数カ所の候補から、一般参加者に伝えたい内容がある場所を比較検討
- ・ 事前のまち歩きを数度行う。見学施設の交渉・打ち合わせ。
- ・ 最終確認まち歩きシミュレーションをJIA建築家協会員（7～8人）で行う
- ・ 資料作成：事前に手分け
- ・ 実際のまち歩きは定員20人程度、それぞれの案内人が歩きながらコミュニケーション
- ・ 終了後、解説・意見交換

■ まち歩きの効用：知識・体感・気づき（歩くスピードと車でのスピードでは見える景色が違う）

- ・ 事前の準備で知識ができ、歩くことによって感覚的に理解できる
 - ・ 街の有りようを考える機会
 - ・ 街歩きから自分が暮らしている街が考えられる
- 街の特色を把握し、その特色を生かす計画、問題点を考えることができる

■ 街の魅力が見えてくる：活気と風格、愛着のある街とは

- ・ 歴史が重層化されている
 - ・ 地形的な変化、必然性がある
 - ・ 防災、衛生の機能面が整っている
 - ・ 魅力的、貴重な建物があり、住民が認識している
 - ・ 住民同士が触れ合える空間を有している（人と人とのつながりがデザインされている）
 - ・ 外来者が住民と触れ合える（守られると同時に開かれた街になっている）
 - ・ 必然性のある視覚的な街の魅力はその街の特色になる。それを継続することにより持続可能な魅力となる
- 行政の適切な手助けと自分の街として住民主体の行動がある

■ 街の問題点が見えてくる

- ・ 防災上の問題：木造密集地帯・ブロック塀・自然災害に対する備え
- ・ コミュニティの問題
- ・ 環境問題：緑の少なさは環境的、視覚的、防災的に問題
- ・ 人の動きが見えてこない
- ・ 目先の利便性を追求することで持続性が失われる
- ・ 持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）



小布施

長野県上高井郡小布施町

- ・江戸時代には天領
- ・東京から250km（長野から15km）
- ・人口約11,000人、観光客はその100倍
- ・「栗と北斎と花」
- ・住民参加の「花のまちづくり」
- ・オープンガーデン



出典：小布施観光案内帳

小布施のメタセコイア



榎一市村酒造場



栗の小径



高井鴻山 (1806-1883) 記念館に至る栗の小径

曹洞宗 がんしょういん
岩松院



- ・福島正則霊廟-1624年没
- ・小林一茶の句碑 - 1816年「やせ蛙 まけるな一茶 これにあり」



葛飾北斎最晩年の絵「八方睨み大鳳凰図」1848年
出典：小布施文化観光協会 小布施日和

おぶせオープンガーデン

オープンガーデンとは個人の庭などを一般の方に公開する活動のことです。1927年にイギリスで創立されたNGS（ナショナル・ガーデン・スキーム）という善意団体が、個人の庭園などを一般の方々に公開し、それに関わる収益を看護・医療などに寄付した活動が、オープンガーデンの始まりと言われています。

おぶせオープンガーデンは、2000（平成12）年に38軒でスタートしました。これは、1980（昭和55）年から取り組んできた「花のまちづくり」、また、小布施町に伝わる「縁側文化」「お庭ごめん」の相乗効果として、訪れた方々を花でもてなし、会話を通して交流を図るもので、官民が一体となって取り組んだオープンガーデンとしては全国初となっています。

小布施町のオープンガーデンは「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という概念のもと庭の規模や質などを問わず誰でも参加できます。「『ガーデン』よりも『オープン』」が小布施町のオープンガーデンです。

出典：小布施町役場 産業振興課



東京の品川区でも同じように、地元民の暗黙の了解のもと、自分の敷地を近道として通り抜けられる風習も存在しています。そこには縁側を設けてご近所さんとの会話を楽しんでいたと聞いています。時代は変わっても、日本的な人と人とのふれあいは大切なことだと思います。

おぶせのオープンガーデンの特色は、参加ガーデンの6割以上が個人登録になっていることです。まちからの参加呼びかけはあったとしても、住民自らがまちづくりに参加されていることがよく伝わってきます。ものを作れてもそれを維持するシステムが重要なことだと認識させられます。

おぶせオープンガーデンのシステム

- ・2000年 38軒でスタート、2012年120軒（番号134）
- ・事務局：行政（小布施町）
- ・行政からオーナーへの支援
 - ：オープンガーデンのガイドブックの作成・配布
 - 1 ページで一軒の庭を掲載し、写真とタイトル、鑑賞期間、見ごろ、駐車場の有無、庭に植えられている花木の種類、オーナーのメッセージで構成されている。
 - ：庭の公開・非公開を案内するための各家庭に置く看板の提供
 - ：イベント開催：2019年花のまち小布施を肌で感じる2日間
- ・庭の手入れ：オーナー各自
- ・営業日・営業時間：各家により異なる



おぶせオープンガーデンマップ

「おぶせロマン号」

平日は1時間間隔

土日祝日は30分間隔

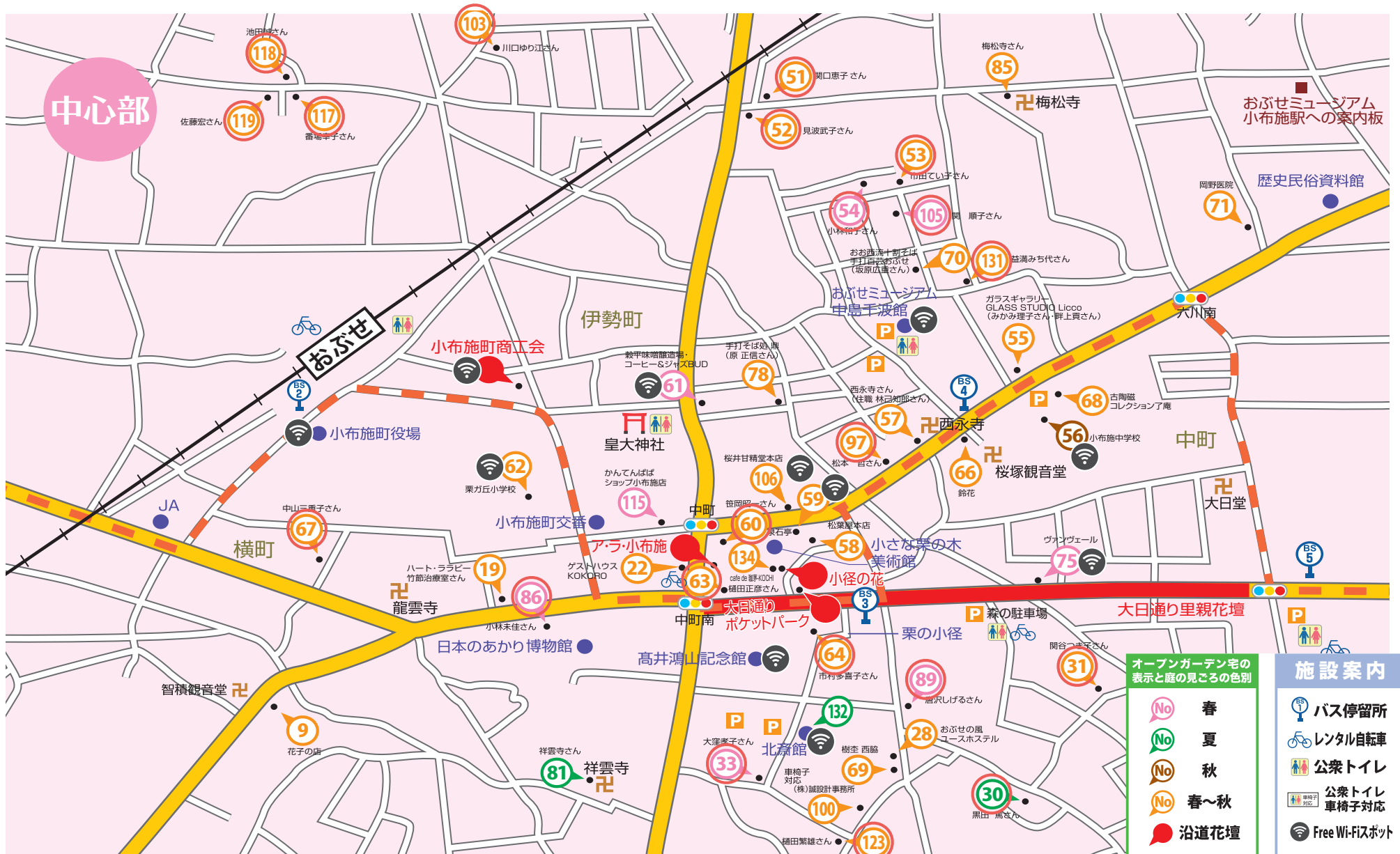
オープンガーデン宅の表示と庭の見ごころの色別		施設案内	
	春		バス停留所
	夏		レンタル自転車
	秋		公衆トイレ
	春〜秋		公衆トイレ 車椅子対応
	沿道花壇		Free Wi-Fiスポット

「おぶせロマン号」周遊コース



Obuse
Open Garden Map
「おぶせ」オープンガーデンマップ

おぶせオープンガーデンマップ



オープンガーデン宅の表示と庭の見ごろの色別	
	春
	夏
	秋
	春~秋
	沿道花壇

施設案内	
	バス停留所
	レンタル自転車
	公衆トイレ
	公衆トイレ 車椅子対応
	Free Wi-Fiスポット

出典：Obuse Open Garden Map

個人宅21軒/42軒

「おぶせロマン号」周遊コース



(株)松葉屋本店



小さな栗の木美術館



小さな栗の木美術館

しまばら水と緑の庭園都市

→市民が主体のまちづくり：オープンガーデンの可能性

- ・価値ある庭の再認識（重要性・独自性の確認・認識）→要調査
- ・維持する方法の模索→手入れには手間とお金がかかる。街を上げての事業にする。→他の街を参考
- ・主体は市民：自慢の庭をアピール。人と人が関わられるようにする→自主性なしの継続は不可能
- ・相乗効果：水のネットワーク、魅力のある施設とリンクさせる。



常盤御殿跡



堀部邸



水屋敷



量石



堀部邸



小早川邸



四明荘



猪原金物店

普賢の空の下、湧水は流れる

そこに島原は存在する。

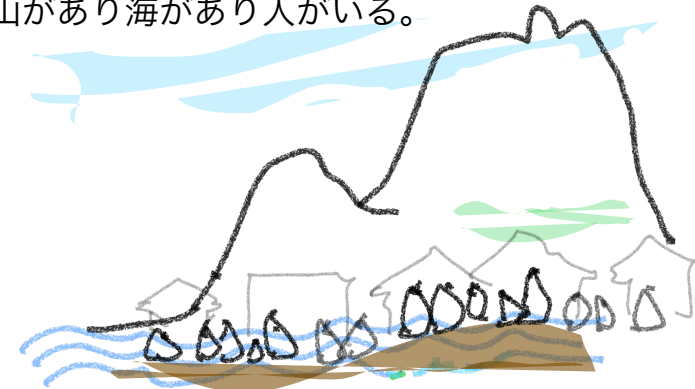
火山環境が島原の基盤構造としてある。
火山環境と人環境（町）をつなぐのは湧
水環境に取り囲まれた町の存在。
火山とヒトが共存する。



海中湧水は昆布を育て、海中流れ山は漁礁として魚を育てる

湧水の水循環による生物多様性が存在する

山があり海があり人がいる。



山のめぐみと海のめぐみは、湧水がはぐくむ。
そのめぐみをヒトが戴く、食べる楽しみとは？
そのめぐみを食べるのは、自然への喜びと共感。
食は基本的な文化である、その範囲は多様で広い。

普賢と眉山が島原の町をつくった。

島原の地域性を際立たせる



かつて普賢を目印に島原湊を目指した

眉山が海に迫る地に城下町と湊ができた背景を考える。
島原の街の活性化は商業だけではなく、地域で考える。
街は農業・漁業・牧畜業・林業などのあらゆる事々に
関わって存在する。

普賢と眉山
島原の町

島原湾

島原の地域性を

島原の市街地は平地がわずかな処に位置する